

板野中学校校長 漆原都夫

平成二年度二年団の学年だより「ねんりん」総集編ができました。

ご覧いただいて分かりますように、ここには難しい教育論も、教師のお説教も入っていません。ほとんどが手書きで、生徒と教師の日々の當みや思いが述べられ心暖まる内容になっています。しかもそれが長期休業日を除いて連日出され三百号にも達していることに大きな意義があります。

だから、保護者の中には子供が病氣で休むと「ねんりん」を読めないことを寂しがり、仁木先生が風邪で休まれると「ねんりん」がないことを心配されたということも聞きました。私もかつて学級だよりを何年間か出しましたが、週刊で年間五十号を出すのが精一杯でした。それだけに二年団が学年主任を中心にして連日書き続けられたことにただ感嘆するのみです。

学校教育において、地域・家庭との連携・協力の必要性はいまさら言うまでもありませんし、本校でもいろんな取組みをしいていますが、こうして毎日、学年だよりを出すということは、何にもまして有効な方法だと言えます。といいながら現在の中学校では、平常授業の上に、部活・進路・生徒指導や各種の学校行事、研修出張等言うまいと思つても忙がし過ぎる日々、すべての先生にまねしてほしいことはとてもできませんが、一つの参考にしていただくと共に、内容や方法についていろいろ御指摘、御指導賜れば幸いです。

本校では人間としての生き方を求めて道徳・同和教育を中心に研究・実践を進めておりますが、二年団は授業実践を中心とした研究実践「峠を越えて」も既にまとめております。このような肩肘を張らないさりげない実践を積み重ねられた二年団の団結とエネルギー、生徒一人一人への愛情と情熱には敬服のほかありません。このような歩みが、地道に根気よく続けられることによつて教師が変わり保護者や子供が変わつて差別や偏見のない社会をつくりあげる力となつてくると思います。今後とも、本校教師団のこうした歩みを温かい目で見守つていただいて御指導、ご協力くださいますようお願ひ申し上げます。

## 「ねんりん」発行にあたつて

板野中学校2年主任 仁木真之

\* 学年通信「ねんりん」を発行して一年が経ちました。当初の予定をはるかに超え三百号に達する「ねんりん」は今年一年の歩みにもなりました。うれしかったこと、楽しかったこと、悔しい思いしたこと、そして悲しいつらい思いをしたこと。今年一年がつまつた学年通信をまとめることができました。

\* 学年通信の願いはいろいろありました。何よりも保護者の方に学校における子供たちの様子や日頃考えていることの一端を知つて欲しいということがありました。寡黙になりがちな、多感な中学時代。それは考えてみれば私たちが通過した道であるのにいつの間にか忘れてしまって遠い昔のことになってしまっている。今こそ子供たちの「あゆみ」に触れ、動きを知るなかから私たちの中学校時代を思い起こすことこそが一番に重要なことと思つたのです。我子の目だけを通して知る中学校でなくできるだけ多くの目を通した中学生をつかんでいただければ、という思いがありました。また、私たち教師が何を考え、何をしようとしているかも知つていただきながら子供を中心に据えた保護者と教師との連携を作り上げることができれば…という願いもありました。

\* 生徒諸君にはともすれば一人に閉じこもりがちなこの時、級友の考え方や思いを知り不安や迷いが自分一人でないことを知つて自信も持ちスクラムを組んで、今を前進していくほしいと思いました。本当のスクラムは互いに弱点や欠点を丸ごと認めるところからスタートするものだと思います。本音の部分を語り合つて初めて信頼関係が芽生えて来るものです。「ねんりん」がそのための一助になればと考えました。

\* しかし、現実にはいろいろと難しいこともありました。「日暮れて、道違し」の感が強くありますが私たちとしての第一歩は踏み出せたように思つております。ときには失礼なことを書いたりしたこともあるうと思いますがお許しください。私たちなりの気持ちであつたとご容赦いただければと思います。お陰で、楽しく過ごせた毎日でした。それだけに一人の教え子を失つたことにいいようのない悲しさがあります。彼女の冥福を祈りたいと思います。本当に、この一年間ありがとうございました。